

5 運動の保存量

運動の保存量 (時間に依存しない量) の主なものはエネルギー、運動量、角運動量であり、これらはある条件のもとにそれぞれ次の保存則を満す。

エネルギーの保存則 … スカラー量の保存 (内積に関係)

運動量の保存則 … ベクトル量の保存

角運動量の保存 … ベクトル量の保存 (外積に関係)

これらは、いずれももとの運動方程式を積分して得られる。それ故、これらの保存則を「運動方程式の積分形」という。

(保存則の効用)

- 運動の詳細によらない運動学 (kinematics) である。力の性質 (保存力かどうか等) だけで決まる。
- エネルギー保存則はスカラー量の保存 (加算的: 質点系で特に有用) であり、しばしば運動方程式を直接解くより運動の解法が容易になる。
- 微視の世界では、力自身よりむしろポテンシャルの概念がより本質的。
- …

簡単のため、まず 1 質点の保存則を議論する。

5.1 仕事と運動エネルギー

1 質点の運動方程式

$$m \frac{d^2 \mathbf{r}}{dt^2} = \mathbf{F} \quad \left(\text{or} \quad m \frac{d\mathbf{v}}{dt} = \mathbf{F} \right) \quad (5.1)$$

と速度 $\mathbf{v} = (d\mathbf{r}/dt)$ の内積をとる。

$$m \left(\mathbf{v} \cdot \frac{d\mathbf{v}}{dt} \right) = (\mathbf{F} \cdot \mathbf{v}) \quad \rightarrow \quad \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} m \mathbf{v}^2 \right) = (\mathbf{F} \cdot \mathbf{v}) \quad (5.2)$$

両辺を時刻 t_0 から t_1 まで積分して

$$\frac{1}{2} m \mathbf{v}^2 \Big|_{t=t_1} - \frac{1}{2} m \mathbf{v}^2 \Big|_{t=t_0} = \int_{t_0}^{t_1} (\mathbf{F} \cdot \mathbf{v}) dt \quad (5.3)$$

ここに

$$T = \frac{1}{2}m\mathbf{v}^2 \quad \left(T(t) = \frac{1}{2}m\mathbf{v}(t)^2 \right)$$

$$W(t_1, t_0) = \int_{t_0}^{t_1} (\mathbf{F} \cdot \mathbf{v}) dt \quad (5.4)$$

を、それぞれ運動エネルギー (kinetic energy)、 t_0 から t_1 の間に力 \mathbf{F} が質点にした仕事という。これらを使うと Eq. (5.3) は

$$T(t_1) - T(t_0) = W(t_1, t_0) \quad (5.5)$$

と表わされる。すなわち、”質点の運動エネルギーの増分はその質点になされた仕事に等しい。” ここから、仕事とエネルギーは実は同じものである事がわかる。また、 $W(t, t_0)$ を t で微分して

$$\frac{d}{dt}W(t, t_0) = (\mathbf{F} \cdot \mathbf{v}) = \mathbf{F} \cdot \frac{d\mathbf{r}}{dt} \quad (5.6)$$

これを仕事率という。

(仕事の意味)

質点の運動を、ある起点 O からの距離 s を媒介変数として表わすと

$$W(t, t_0) = \int_{t_0}^t \left(\mathbf{F} \cdot \frac{d\mathbf{r}}{dt} \right) dt = \int_{t_0}^t \left(\mathbf{F} \cdot \frac{d\mathbf{r}}{ds} \right) \frac{ds}{dt} dt = \int_0^s (\mathbf{F} \cdot \mathbf{e}_t) ds$$

$$= \int_0^s F_t ds = \int_0^s F \cos \theta ds \quad (5.7)$$

ここに、 $\mathbf{e}_t = (d\mathbf{r}/ds)$ は第 3 章で議論した接線ベクトル、 $F_t = (\mathbf{F} \cdot \mathbf{e}_t) = F \cos \theta$ は力の接線成分、 θ は各点における力と接線との角である。 s の積分で、区間 $[0, s]$ を N 等分して $\mathbf{r}_i = \mathbf{r}((i-1)s/N)$ ($i = 1 - N + 1$), $\mathbf{r}_1 = \mathbf{r}(0)$, $\mathbf{r}_{N+1} = \mathbf{r}(s)$ とすると

$$W(t, t_0) = \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^N \mathbf{F}(\mathbf{r}_i) \cdot (\mathbf{r}_{i+1} - \mathbf{r}_i) = \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^N F_x(\mathbf{r}_i) (x_{i+1} - x_i)$$

$$+ \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^N F_y(\mathbf{r}_i) (y_{i+1} - y_i) + \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^N F_z(\mathbf{r}_i) (z_{i+1} - z_i)$$

$$= \int_{\gamma} (F_x dx + F_y dy + F_z dz) = \int_{\gamma} (\mathbf{F} \cdot d\mathbf{r}) \quad (5.8)$$

と書いて、これを経路 $\gamma: \{\mathbf{r}(s')\} s' \in [0, s]$ にそった線積分という。”仕事は一般には経路による。”つまり、起点 O ($\mathbf{r}(0)$) から終点 P ($\mathbf{r}(s)$) までのまた別の経路を γ' とすると、一般には

$$\int_{\gamma} (\mathbf{F} \cdot d\mathbf{r}) \neq \int_{\gamma'} (\mathbf{F} \cdot d\mathbf{r}) \quad (5.9)$$

実際、起点と終点を入れ替えるだけでも、仕事の符号は変る。 γ と同じ経路を、今度は P を起点、 O を終点とする経路を $-\gamma$ で表すと

$$\int_{\gamma} (\mathbf{F} \cdot d\mathbf{r}) = - \int_{-\gamma} (\mathbf{F} \cdot d\mathbf{r}) \quad (5.10)$$

$W(t, t_0)$ が経路によらない時、力が「保存力」であるという。この時、 $\mathbf{F} = F_x \mathbf{e}_x + F_y \mathbf{e}_y + F_z \mathbf{e}_z$ はあるスカラー函数 $U = U(\mathbf{r}) = U(x, y, z)$ の偏微分係数 (導関数) で書ける ($W = -U + \text{const.}$)。

$$F_x = -\frac{\partial}{\partial x} U, \quad F_y = -\frac{\partial}{\partial y} U, \quad F_z = -\frac{\partial}{\partial z} U \quad (5.11)$$

これを、まとめて (ベクトル記法で)

$$\mathbf{F} = -\nabla U = -\text{grad } U \quad (5.12)$$

と書き、 ∇ をナブラ (nabla)、あるいは grad を gradient いう。これらは、線型微分作用素 (operator) である。

$$\nabla = \text{grad} = \begin{pmatrix} \frac{\partial}{\partial x} \\ \frac{\partial}{\partial y} \\ \frac{\partial}{\partial z} \end{pmatrix} = \mathbf{e}_x \frac{\partial}{\partial x} + \mathbf{e}_y \frac{\partial}{\partial y} + \mathbf{e}_z \frac{\partial}{\partial z} \quad (5.13)$$

(例)

重力、バネの力、万有引力、クーロン力、... 保存力

摩擦、空気の抵抗、... 非保存力

[仕事とエネルギーの単位]

力 \times 距離 = $\text{kg m/s}^2 \cdot \text{m} = \text{N} \cdot \text{m} = \text{J}$ (ジュール) ... MKS 単位

cgs 単位では $\text{dyne} \cdot \text{cm} = \text{erg}$ (エルグ)

1 N = 10^5 dyne より、1 J = 10^7 erg

また、仕事率の単位は 1 W (ワット) = 1 J/s

(簡単な例)

○ 1 kg の重りを静かに 1 m 持ち上げるために必要な仕事 (エネルギー) は約 $9.8 \text{ N} \cdot \text{m} = 9.8 \text{ J}$

○ 等速円運動では力の向きと速度の向きが垂直より、力は仕事をしていない。→ 運動エネルギーが保存される。すなわち、速さ (速度の大きさ) が一定

○ 1 次元運動

(自由落下運動) z -軸を垂直上方向にとって、重力は $\mathbf{W} = -mg \mathbf{e}_z$ より

$$\begin{aligned} W(t, t_0) &= \int_{t_0}^t (\mathbf{W} \cdot \mathbf{v}) dt = \int_{\gamma} (\mathbf{W} \cdot d\mathbf{r}) = \int_{z_0}^z (-mg) dz \\ &= -mg(z - z_0) \end{aligned} \quad (5.14)$$

そこで、 $U(z) = mgz$ を重力の位置 (ポテンシャル) エネルギーとすると $W(t, t_0) = -U(z) + U(z_0)$. そこで、 $t \rightarrow z$ で書いて Eq. (5.5) は $T(z) - T(z_0) = -U(z) + U(z_0)$. つまり

$$T(z) + U(z) = T(z_0) + U(z_0), \quad \text{or} \quad \frac{1}{2}mv^2 + mgz = \frac{1}{2}mv_0^2 + mgz_0 \quad (5.15)$$

これを、(力学的) エネルギーの保存則という。

(バネの運動) 復元力は $F = -kx$ より

$$W(t, t_0) = \int_{x_0}^x (\mathbf{F} \cdot d\mathbf{r}) = - \int_{x_0}^x kx dx = -\frac{1}{2}kx^2 + \frac{1}{2}kx_0^2 \quad (5.16)$$

そこで、 $U(x) = (1/2)kx^2$ をバネの位置エネルギーとして $W(t, t_0) = -U(x) + U(x_0)$ より

$$T(x) + U(x) = T(x_0) + U(x_0), \quad \text{or} \quad \frac{1}{2}mv^2 + \frac{1}{2}kx^2 = \text{const.} \quad (5.17)$$

○ 万有引力ポテンシャル: 3 次元 (or 2 次元) 極座標で

$$U(r) = -G \frac{m_1 m_2}{r} \quad (5.18)$$

偏微分の公式 $(\partial r / \partial \mathbf{r}) = (\mathbf{r} / r)$ と動径方向の単位ベクトル $\mathbf{e}_r = (\mathbf{r} / r)$ を用いると

$$\begin{aligned} \mathbf{F} &= -\frac{\partial}{\partial \mathbf{r}} U(r) = -\frac{\partial r}{\partial \mathbf{r}} \frac{d}{dr} U(r) = -\frac{dU(r)}{dr} \frac{\mathbf{r}}{r} = -\frac{dU(r)}{dr} \mathbf{e}_r \\ &= -G \frac{m_1 m_2}{r^2} \mathbf{e}_r \end{aligned} \quad (5.19)$$

すなわち、万有引力は動径方向 (の逆) を向く。 $\mathbf{F} \parallel \mathbf{e}_r$ この様に力の方向が座標原点方向を向く力を「中心力」という。この時、ポテンシャルは r の向きによらず、その絶対値 $r = |\mathbf{r}|$ だけの函数である。